

Inside/SAMURAI

KiLa

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

このお話は

インフィニット・ストラトスの三次創作

本サイト内の作品【IS_Inside/Saddo】の二次創作
になります。

I/Sのモッピーの性格が違つたら、というIF短編。

※Inside/Saddo本編を読んでいることが前提で構成している部分が
多々あります。あしからず。

※真下屋氏の了承のもとに投稿しています。あしからず。

目

次

夢

/

Prologue

D
O
N,
T

L
O
S
E

Y
O
U
R
S
E

F

吐
き
そ
う
だ

41

8

1

夢 / Prologue

——それは何度目の敗北だったんだろう。

道場の床に這い蹲るのは二つの矮躯。幼子、稚児。小学生。

立つは一人。超常の頂点、武術の花、いいや武力の最終到達点か。少女というには不相応に完成した、してしまった女が立っている。

挑んだ子どもと挑まれた大人。それはそんな構図。

剣道場は斜陽にて。黄昏の立ち込める黄金のなかで、敗者と勝者の決定的な違い。

何度もだつたろう。何度挑んだのだろう。そして何度目の同じ結果なんだろう。わからない。わからないと断言できる程度の繰り返しで、変わらない結末を出力される。された末。積み上げた黒星にさらに一つ。

敵わない。届かない。

まだ。

そう、まだだ。

まだ、届いていないだけ。

少女は刀を握っていた。真剣だ。模造刀でも逆刃刀でも、ましてや手加減なんてなく。迂遠な婉曲をとことんにまで廃絶して。

その人は。一切の遊びなくただ真撃に、小学生相手に真剣を抜いていた。なのに対する小学生二人。それこそ子どもでしかない彼らは、道場に相応しく道着に竹刀という出てだちで、その女に向かつていつていた。

圧倒的な戦力差。数でこそ単純に倍であるが、そもそも年齢なんて一回り近くも差があるて、握る獲物だつて天と地だ。第一なにより、彼女はこと『暴力』^{あい}の化身であり、仮に彼ら二人が同じく真剣を握っていたとしても、逆に向こうが無手であつたとしても、到底届かないことが明白なほどに桁外れ。だというのにあろうことか少女が日本刀を握つていて、子どもが竹刀を手にするという逆転現象、捩れた対等。

勝てる道理はない。勝ち筋はない。勝利に繋がる軌跡がない。

それでも。二人は。

勝てると踏んで、挑んでいた。

見ようによつては大人気ないありさまだつたか。負けた二人の想いは真剣だつた。真面目に、純粹に、烈火の心意氣で彼女に挑んでいた。ゆえにならば幼子であろうと真撃に向き合つうは礼賛絶賛される素晴らしい人間らしさで、褒めちぎつても違和ない。

が、それでも限度はあるう。限界はあるう。

殺人だか活人だかの道理うんぬんの以前、子どもに本物の刀を向けるのは、果たして人間として正しい在り方なのか——そんな風に、当事者でない三者は避難するか。

だが当事者である彼らには、這い蹲る『彼』と『彼女』の二人には、そうでなくてはいけなかつた。そうであつてくれなければ納得できなかつた。正直、手心の微塵さえ介在しない武威でもつて相対してもらわなければ、得心なんてしないのだ。

子どもの意地が、わがままか。武人としての心得か。いいや違う、違うのだ。そんな大層大それた大義名分なんかじや説明つかないのだ。

全力の彼女に勝つんだ。全靈の彼女に至るんだ。

世界最強の彼女に勝つんだと、二人は約束したのだから。

だから諦めない。そんな結末は認められない。彼女に勝つのは荒唐無稽なんて言葉では万倍以上に足りないけれど、誰かが言つたか。理不尽が星の数ほどあるように、奇跡だつて人の数ほどあるんだと。……違うな馬鹿だな、それでは弱氣だ。

勝つ。純粹に。俺達で勝つんだ、と。

『まだ、だぞ。まだ……負けてない』

そう言つて敗者の片割れ、幼女は立ち上がる。床にばらまかれた黒髪をすくい上げるよう竹刀を支えに立ち上がり、歯を食いしばる。全身には激痛。齡十を超えない幼

さの絶頂で、蝶や花をこそ愛するが相応しいその女の子は、なにでもそれでもそれだからだと、満遍の灼熱がなんのそのと起き上がる。真金、人型の刀。

それは勝者の少女とある種の同様に、歳不相応に鑄造されたかのごとく玲々の赤金。幼さのなかに凛と垣間見える鋒両刃の輪郭は、その身の愚直さを物語る。

しかしその少女は、白痴阿呆の道理に暗いわけではない。徹頭徹尾不理解を貫く阿呆でも、認められないからと喚くだけの馬鹿ではない。意地も矜持も——そういう言葉をまだ知らない幼さだろうが——そうした信念を確かに握つてもいるが、それではないもつと深い確信を持つている。

そうとも。彼女は決して諦めない。『武』の最上を前にして、思い知つて、それでも柄を握り締める無頼女。

道理が解らぬ阿呆でないが、理屈を鑑みない馬鹿なのだから。

『うん。そうだ』

——それに『僕』は同意する。そんな『君』に同調して、追いすがつて、微塵粉々に粉碎された専心の刃をつなぎ合わせる。

『君』が諦めずに立ち向かうから、『僕』も負けたくない。

『君』が『そう』あつてほしいと、言つてくれたことがあるんだ。

『君』が『そう』あつてほしいと、言つてくれたことがあるんだ。

強がり。

端から見ても、人伝てに又聞きしても、きっと違^{たが}えることなく正確に伝わる二人のさま。

貴賤なく加減なく、コテンパンのズタボロにされたその短躯が吐き出す言葉なんて、強がりやせ我慢以外の色はない。勝つんだ、負けない、諦めない。不变の真実^{やいば}を支えにしても、それが瀕死のさえずりでしかないことを、どんな鈍感だつて誤解しない。

それほどにボロボロ。それまでにオンボロ。悲惨、凄惨。誤解を承知でありていを表現すれば、幼児虐待といつたいどんな差異があるのか。おおよそ良心の欠片を覗かせない、鬼の所業か。

だが。

『懲りないな、お前等も』

その青臭い、幼い陽光の輝かしさを目の当たりにして。

少女は、頂上の女は、純粹に笑いをたたえていた。

さもすれば、不相応に柔らかい花のほころびに似て掠めた口角だった。

ゆえにここに、再び剣が抜刀される。

加減はない。無論、悪意はない。しかし満開たるその心は、確かに愛に燃える零下の

酷寒。

冷夏、千の冬。

芥子粒の悪童に向ける手向けのつもりか、みなぎる霸気の天井なきこと。武威を一方的に語らう永劫の片思い。全靈ゆえに一度足りとて彼らに向けられなかつた深奥の劍技が、眞実白日のなかに現出を開始する。人型の暴威。

対して、生の祝福を受けたばかりの子鹿よりも頼りなく、吹けば散る灯火のように、視線のレベルを戻した彼と彼女。言わずもがな、これから行われるだろう魔剣の前に、彼らが耐えられるだろうだなんて正常な精神でなくとも誤解はない。不相応、過ぎた夢。きつと立ち上がりで床板を舐めていたほうが、無事に明日を挙めることは当たり前。それこそが正しいあり方。

でも――。

だから――。

正しいことよりも、なにが間違つているのかを知つてゐるから。

虚勢を張り上げて笑うのだ。震える膝つ小僧よりも盛大に、己の愚かさを哄笑せろ。

そして黄昏に白刃が触れる。

斜陽の道場、笑う二人と微笑む少女。酷く滑らかに空氣を舐める切つ先、白刃の残像は緋色を返し、逆光のようになおと白く空間を裂く。咲き誇る。

しらは

これから見^{まみ}えるはまさしく剣の秘奥。単純な理合いを最大で抜き放つ、不条理極まる冒流の一撃。どんな一般人にも理解でき、その道のものなら誰しも感嘆せざにはいられない。思考の境外、極限の一つ。その間際。それでもブレない確固足るものを感じながら。

『篠ノ之流――』

それはまるで紅蓮に凍る雪片のように。

DON, T LOSE YOURSELF

—— 始めに貰つた物は、名前だつた。



I S 学園とかいう女の園があるらしい。

らしいというのは女の園という部分に関してであつて、とうの I S 学園自体は存在する。

そこは、女性にしか動かせないインフィニット・ストラトスとかいう飛行強化外骨格の操縦者^{ランナ}を育成する特別国立高校で、夢見るうら若き乙女諸君らがなにをトチ狂つたのか、オイル臭い機械装甲に包まれながら嬉々として青春の一ページを浪費している。嘆かわしい。甘酸っぱい少女の芳しさが機械油に狂わされるのが心底真面目にもつたいない。どこぞのお姉さまだかに感化されたかはまったく存じ上げませんが、イチ男

子高校生としては一緒に青春エンジョイしてくれる絶対数が少なくなるのがいただけない。俺に付き合ってくれる女の子なんていない？ ないですかそーですか。

まあ正直匂いなんて女の子も男の子も変わらんです。青臭い少年の幻想です。実際のとこ磯くさ嘘です気取つたごめんなさい。我が実姉の洋服とか俺のと一緒に洗うのが申しわけないくらいにはいい匂いします。嗅いではいなーい。断じて。

でもやつぱり香るなら男より女の子のがいい。当然である。『今日は部活で汗かいてるから……』なんてJKがいたらもうあれじやない。真っ先に蒸れたその腋を賞味預かり給うね。そんなことない？ ないですかそーですか。

とかくそんな女の子の集まる女子校なのだ。

そこに俺は通うのだ。

しかしワタクシ、織斑一夏は男である。実は男として育てられた女な経緯も、性同一性なんたらとかは無論ない。せいぜい中学の文化祭で——いや止めよう。俺の沾券に関わる。姉に弄ばれた男子中学生なんていない、いいね？ でも年上のお姉さんといっぱいなかよくしたい俺はいる。いいね？

しかしながら、そんな俺が女子校に入学することになつたのだ。繰り返し、ISは女の子にしか乗れない。それのランナー育成学校＝女子校。それはわかる、そりやそうだ。動かせない男に席はない。

ではどうして？ 単純である。

俺がＩＳを動かせる世界唯一の男だからなのだ。

で。

どーにかこーしてあーなつて、入学させられてしまったのだ。

不満はある。進路を強制的に決められてしまえばそりやあ、ある。しかしながらだだをこねる勇気も一五歳という年齢では胡散霧散と尽きてしまい、あとは流れ作業でこのザマだ。暖簾に腕押しとひょうきんに振る舞うのはきらいじやないが、濁流に流される小石はいやなものだ。諸行無常だよこの世界。

不満はある。不満はある。不満はある、が。
期待もある。

その一抹に魅せられてしまう程度に未完成な自分であり、一握に賭けられる熱がある。若気の至りはわりと好み。咲かなきや花は枯れられない。

まあとどのつまり、俺氏けつこう乗り氣で入学であらせられる。

校舎の陰で背徳^{レズ}つてるお姉さまがいなかとか期待してる俺はいない。

しかし。

「空う気が甘い」

まつたく。

「体が熱い」

なんて。

「素晴らしい！ これが、女の園というものか……ッ！」

なんて役に立つんだISは！

いいぞ。非常に優れて正直いまでは反省している。

スカート、生足、カラータイツに黒ストまで。ときおり駆け抜ける春風にゆれる裾おまえたち、柄がらの通りに胸が高鳴ってしまう。下半身にしか目がいつてない？ 男の子だもの意地がある。

件のIS学園、その入学式で校門前。すぎ行く少女らに視線を這わせながらことの発端たるISを褒め讃える男がいた。というか俺だった。

なんか視線が痛い。目線が怖い。注目の域を超えてもはや槍衾くわいだろこりや。いやさらかしちまつたワテクシに非があるとはいえ、ちょっとあんたらこつち見すぎだろ。そんなに俺が珍しいか？ ……珍しいか。男だものね。パンダなう。パンダなう！ 無理はしていない。

しかし開幕ボツチになりそうな頽木を打ち込んでしまった気がしないでもないが、とかく遅刻はいただけない。おんにやのこに見とれて間に合わないとか高校デビュー失敗にもほどがある。時間にルーズなフェルマータ系男子のレッテルなんてお断りでござる。

こつち見てひそひそしている上級生方に我に返つて赤面なんてしてない。ない！



校門からドロンさせていただいて玄関前のクラス割りをチェック。

一年一組らしい。一年一組織斑一夏。なんとも語感がよろしいが何番煎じ感が拭えない。中学時代すっと一組でござんした。

その足取りで流れ作業の体育館。入学式である。お偉いさん方の式辞やら扇子持つた生徒会長さんやらのありがたいお言葉があつたりあまつさえ意味ありげに俺にウインク飛ばしてた気もしたが、同中・同クラスの相川さんとメールしてて覚えてない。それそろスマートなフォンがほしいぜ。

そして現在この時間、一年一組の教室に至るのだ。

「みなさん入学おめでとうございます。私はこのクラスの副担任を務めさせていただき

ます、山田真耶といいます。これからよろしくお願ひしますね？」

やまだまや。

回文である。

しかしローマ字になおすとYAMADAMAYA。逆から読んだらアヤマダメーイ。
亞山田五月？ 西尾先生を見習つてもらいたい。

なんておもしろくもない適當な羅列をアタマのなかで疾走させるが、当然そんな逃避は現実に一光もたらすはずもない。むしろ思考が加速しちまつたせいで体感時間の伸びが抜群だ。返つて長く感じちまう。

つまりようは、この瞬間が早く終わつてほしいと願つてるわけで。

「それではまず、自己紹介から始めましょ。出席番号一番の人、お願ひします」

「え、あたし？」みたいな顔させてる出席番号一番・相川清香ちゃんに『がんがれ』の意を込めてウインク投げたら『（^_^）』なんて顔で肘鉄砲で打ち返された。乱太郎馬鹿にすんなし。

そんないつも通りのノリを思わず披露しちまつて、なにげなく視線の合つた国津さんとやらが若干引いてた。……泣くな俺。

話を戻してつまらせてもらうが、なんともこの教室、空気が気まずい。
空う気がます……サーーセン。

視線の雨。目線の槍。注目のガンマ線照射。

今現在、俺はものすごくたくさん人の視線に晒されていた。

そりやそろさ。不本意ながら世界唯一の肩書きを背負つてしまつた俺である。少女の学び舎に黒一点、混入してしまつた異分子である。視線が募る。意識が集う。座席も最前列のど真ん中、正面には先生。なにこの保護観察対象。巨大で強大で大々的な生徒会長よろしく教室のど真ん中じやないだけマシか？　ばつてんあの人アンノウンじやん。なにそのスケスケの悪魔俺にもくれよ。

しかしこうして言葉を重ねているが、実際これは体験しなけりや伝わらん。やたらかわいい子ぞろいのなかに一人放たれて有無を言わさず視線に晒される。一挙一動、つぶさに観察されるこの気持ち、あわやこのままだと新しい領域を開陳しそうである。あれ、それだともとから素質があつたつてことにならね？

しかしそろそろ現実に帰ろう。

いくら目を逸らしたところでときは着実に流れるのだ。無間神無月は必要ないのだ。さしあたつて、いま俺のすべきことは自己紹介を考えること、やつべちよいとハチワーンなダイブキメてる間に自己紹介が二列目まできてる。

考えろ俺、今すぐに。第一印象、始めが肝心。たかが自己紹介ごときといえ、ここでミスつて今後の学園生活に亀裂が走るのは拙者の望むところじやない。じやないのだ

が、いかんせん、思いつかん。その場の勢いで生きてる自覚は存分だが、思考は放棄していいもんじやない。

考える。考える。思いつかない。行き当たりばつたり、そんな俺もきらいじゃない！

なので今はこのいい匂いのする空気に身をまかせるじやんよ。

すごいな女の子。野郎がまつたくないといとこんな香しいの？ フレツシユな青さ。つつてもしかしながら、気合い入れすぎて香水キツすぎる感は否めない。匂いの強い柔軟剤でもごまかしているのだろうか。ああ窓、換気扇。窓際の座席がうらやましい。なんて思つて窓際に視線をむけて。

——陽光に流れる黒髪の。

俺は。

——いちび 尾の房に緑布。

その。

——鋒両刃の、諸刃の剣。

焦げるような衝動を。

「それでは次、織斑一夏くん」

「——、はい」

押さえつけて、飛び出しそうな心臓に満足して、外面をこれでもかつて偽つて立ち上がる。

わかつてたろ。期待してたろ。それ以上に確信があつたろ。だつたらなんだよみつともない。予定調和の予測通り、なーにビビつてるんだつて。震える足を無視しろよ、狂おしいなにかを裁断しろよ。ボイン（爆発の意）しそうになつてんなよ。あらあらそういうれば予想以上にバストフル。正味俺の周りの女の子は熊本先輩ばかりに慎ましい娘ばっかりなのでバランスでもとつてるんでしょう。

……なんか色々台無しだけど、真つ平らでいい自閉症にならなくてすんだ。ビー・クール、ビー・クール。もちろん俺にダンゴールはいない。しかし弾ゴールはいる。別に弾をデイスつてはいない。

いずれにしろ、どうとう俺の自己紹介。

『お前』の視線ばかりが、気にかかる。

「織斑一夏です。誕生日は九月二七日。血液型はAB型。
好きな食べ物は——」

そして、好きなものを吐き出した。

◆
今の俺を誇るように。

俺の自己紹介は無事に終わり、順当にそのあとの人達に番がまわる。
だけれどまつたくらしくもなく、俺の意識はお前だけに向かってしまう。
ほかの声が耳に入らない。

「初めまして！ 岸原理子ですっ」

耳に入らな眼鏡が似合うな。

「鷹月静寐です。どうかよろしくお願ひします」

耳に入らふむしつかりものの世話焼きと見た。

「か、鏡ナギです……っ」

耳に入引っ込みじあんな君も素敵だ。

「四十院神楽です」

うつわなにあの子めつき美人！

すまない。許して。僕は駄目だ。弱かつた（女の子に）。

どういうことだつてばよ I S 学園。これ絶対顔面偏差値とかも入学考査の対象だろ。I S 適正とルックスは比例の関係にでもあるんでしょうかね。うちのおねーちゃんが美人さんなのにも納得でござる。

でもイッピー知つてるよ。イッピー鼻曲がつてたり左右の目の大きさ違つたり肌白かつたりで思いのほかイケメンじやないつて、イッピー知つてるよ……。

うつせえイッピーは雰囲気イケメンなんだよ。全部 o k i u r a つてやつの仕業なんだ。

御手洗くんとかいう中身も外見もイケメンな輩は絶許。妬んではいない。

「——篠ノ之箒だ。ゆえあつて I S のテストパイロットなるものを務めさせていただいている。以後お見知りおきを」

その散漫たる俺の意識を再び釘付けにするが凜の声。

明瞭透徹なる刃のさえずりは声の記憶を更新し、離れていた時間が彼女をより強固なものへ砥ぎ鍛えたことを過去を裁断しながら教えてくれる。粘りと鋭利の体现、玲々の鋼。

その瞬間、その一時。^{いつとき}確かにこのクラスから音が消えた。自己紹介の恥かしさと緊

張、そして今後の学園生活への不安、期待。ない交ぜで浮ついた朗らかさのなかで六境をかくも宣言するがごとき刃のさまは、女子高生らから言葉を奪うには底冷えにすぎた。そうとも、教師である山田先生からも、俺からすら言葉を奪う程度に——かつこよかつた。

たかが一言、ゆえに明快。虚飾の介在を許さないあるがままの朴訥。

その瞬間、俺達は彼女に見とれたのだ。

え、俺の幼馴染みかつこよすぎ……!?

「何を呆けている小娘共。今年の入学生も例年に逸れない痴愚なのか?」

だから、茫洋に蕩けた意識を現実に引き戻してくれるのは。

「お、織斑先生っ」

「どうした山田君。見蕩れるのは構わんが、第一印象は初対面にしか与えられんぞ?」

同様に、刃を体現できる存在にほかならない。

織斑千冬。我が麗しのおねーさまがそこにいた。

「諸君、初めまして。私がこのクラスの担任、織斑千冬だ」

そう言つて教壇に立つ姿のなんと勇ましいことか。

先ほどの自己紹介を冷え冷えと表現するなら、こちらはなんとも暴力的に鮮烈だ。

しかし弟としては雄々しさよりもちつと慎まさしさとかが欲しい。男子中学生に黒

の下着を洗わせるのはおいやんよくなないと思うな。ブルツとセーラーなお店に売り飛ばしてくれようか。

途端に、「きやあ」×27の黄色い悲鳴。

いや別に俺の脳内ダダ漏れで女の子に引かれたわけじゃない。

感激だ。

みんな、感激とやらできやあきやあの雄叫びを上げている。

なにせ世界最強のISランナー様のご登場である。IS界の言わば大スター。そりやあ感激感嘆感涙くらいはしちやうかもね。言葉が言葉をなしていない。

それら各々を個別に台詞で表したところで言つてることはほとんど同じだから省略するが、参考程度に「濡れるツ！（意訳）」……いやいやイミフすぎんぞなんだよ、叱つて？ 罵つて？ あなたのためなら死ねる？ これがあの倍率数十倍を誇る天下のIS学園女学生の言動なのか？ 半狂乱にラリつちまつてんじやねえかよおい。アツパーとサイケデリック合わせてキメた頭ハッピーセットの輩しかいねえよ。うそだろ

承太郎！ しかし見つかったマヌケは俺だつた。
「久しいな篠ノ之。強健そうで何よりだ。
承太郎！ しかし見つかったマヌケは俺だつた。

が、あまり同級生を魅了してやるな。おまえのような輩のおかげで、毎年、性癖に不自由な奴が後を絶たん」

「褒め言葉として、受け取らせて頂きます」

「宜しい。座れ」

しかしとうの千冬様は降りかかる万雷もなんのその。

立ちっぱになつていた女生徒さんを軽く諫めると着席に促した。

つていうか性癖？　え？　ここつてそんなおとボクつた学校なの？　ええつ！（歎

喜）

いや違ちがえーよ。

それじやあ女装してエルダーにならないとじやん。おいやめろ馬鹿野郎女装とかいうなよそんな話はやめろ中学の過去踏み荒らして尊厳踏みにじるのが好きなのかつてばよ。俺がトラウマつてるマイスターだつたら勇気の剣（意味深）を手に『オ、リ、ム、ラ、!!』の憤怒とともに世界にクソアーメンを唱えてるところだ。誰かどうか花びらに口づけするような日々をください。ラディカル・グッド・セパレイティスト（女性限定）。俺に居場所などなかつた。

「——改めて諸君。私が担任だ、織斑千冬だ。

私の職務は君たちにI-Sの何たるかを叩き込むことにある。

これからお前たちには課題を出す、苦難を強いる、困難を与える。決して簡易安易なぬるま湯を供給しないことを約束しよう。しかし、なあに。案ずることはない。知恵と勇気を全力ですり減らして燃焼すれば実に容易に踏破出来る程度の壁に相違ない。

ここが世界の最先端だ。アイエス

ゆえに必ずついて来い。——返事を求む

俺がトリップつてるのをよそにまるで合戦前の侍頭かよつてくらいの口上でクラスを鼓舞してくれやがるのが恥ずかしながら俺の姉です。そりやかつこいいけど。シビれるけど！　いやでもだつてどこにJKに対して勇気を晒せつて発破かける教師がいるんだつて。ドン引きだよ。DREAMS COME TRUEすぎるよ。フェイスレス司令だつて真っ青だよ。ロツズにフロムがゴッドしちゃうよ。

「「「はいッ！」」

……姉さん、事件です。

こここの女の子はみんなサムライみたいです。

まあその筆頭が俺のお姉ちゃんなんんですけどね！

姉さんが事件です。笑えないオチだぜ。



「入試のときに I-S を動かしたんだって」

「やつぱりこの学園に入学してきたんだ」

「ねえ誰か話しかけなさいよ」

「わたしいつちやおうかしら」

「待つてよ、あなた抜け駆けする気？」

H R 明けの休み時間の聴覚が捕らえたのは遠巻きな言葉の数々である。

なんぞこれ。学園唯一の男子たる俺としては学校最初の休み時間ならば、それはもうしつちやかめつちやかクラスメイツに囮まれて質問攻めに合うと思ってたんだが。おい止めろよ押すなよ子猫ちゃん、男の子が珍しいのはわかるけどがつつきすぎはレディーにあらじだぜ？ 俺はどこにも逃げないから一人ずつ順番に L I N E 教え（以下略

などという空想は妄想に昇華したというのはいうまでもなく。

予想に反してこの通り。俺の周りだけぽつかりと穴を空けて人がいない。

……なにこれ新手のイジメだつたりします？ 聖ルピナス学園に男の分際でしゃしゃるなつてこと？ マジかよ野球選手の M V P ばりに質問内容考えてたのに。関係ないけどここから女子アナ目指す子とかいるんですかね？ ミス I-S とかやつたら大盛り上がり、らんか。大顰蹙だろうなあこのご時勢。

などとあわや便所飯すら幻視し始めたこの視界の隅で。

黒い。

ポニーテールが。

揺れた。

(あ、)

辛うじて言葉に出なかつた。

窓際の席、立ち上がつた彼女に、追隨してポニーテール。

カツカツと床面を軽快に叩きながらも凛としてしゃらん。堂とした悠々。視野の端つこにおいてすら強烈な存在感を見せ付ける彼女は、これまた——別の意味でだが——存在感をあふれさせる女生徒を一人連れ立つて、そのまま教室から出て行つた。

「…………」

思わず立ち上がつて、追いかけていた。



そして、まるで上級生に告白する女子みたいな佇まいで。出で立ちで。

織斑一夏は屋上に通ずる扉の裏に身を隠し、荒ぶる鼓動を整えていた。

赤錆色の防錆塗料が塗られた鉄の扉一枚。どうしてかこここの戸だけが自動じゃないが、たつたそれだけを隔てた先に、お前がいる。……緊張してるのかよ、らしくもない。

——その『らしさ』をくれたのは誰だつたか。

「いやはや聞きしに勝るところだな、ここは」

「あら、そうでしようか。まさしく聞きおよんだ通り、の場所じやないかと思ひますけど」

「ど、言うと?」

「女の園」

「今までだつて女子校だつたじやないか」

「品行方正、とは斯くあるべしかと」

「なるほどなあ」

なるほどなあ、じゃねえよ。なんだよそれ。どんな思考回路だよ。まったくわからんぜ。あれか、流行りのメンh（ry不思議ちゃんか？）躁鬱暗示してたタイプの野球用語がお得意ですって？ 誰だお前が気分障害だなどと宣うやつは。マジ引くわー。

ドアの向こう、その屋上。全面に緑化がされているだのなんだのが売りの屋上とやらに設置されたベンチにて二人。二人の少女が談笑している。それが扉の隙間から漏れ

聞こえるわけで、つまるところ盗み聞き。我ながら悪趣味だ。

不可抗力だとはいえ、会話を見ず知らずのやつに聞かれるのはいいもんじやないよ。特に女の子が人目を忍んで一人つきりでお話だもの。それはことさら癪に触っちゃうよね。よろしくない……踏み出そう。

俺なら出来る。俺なら出来る。俺なら出来る——思うは埋没、行き着くは深奥。実に単純な自己暗示。

しかし気休めに思われるだろうそれだつて、俺に取っちやあ重要なもの。呼吸が整う、視界が開ける、音が澄んで肌がひりつく。望む未来への初期化／最適化は前時代的な根性論に通ずる精神補強。柔いもので堅く振舞つたところでそれは高速で壁にめり込む豆腐に違わず、しからば思い描くは最強最高最大の自分。あるがまま、成すがまま。ゆえに俺は始めから『そう』ある存在であり、疑念はない。事実を取り上げろ、認識を固定する。固定観念を観察する固定観念を二重三重に連ねて多角的思考装置を偽装する——出力。イッピーなら、出来る。

羅列クリアー。

俺は、ドアから身を乗り出した。

「ん、誰だ？」

楽しげな会話が寸断される。

耳に心地よい音色がきりりと締まる。

春風を孕んだ一房の黒髪をまとわせて——篠ノ之箒と、目が合つた。

「よう」

震えて、ないよな？

上ずつて、ないよな？

ちゃんと、お前と目を合わせられているよな？

「久しぶりだな、『箒』」

「——。ああ、そうだな」

一刹那の間はいつたいなんの表れだつたか。

驚愕？ 空白？ それをねじ卷いた末の、ここに至るまでの道中を察して？ きつと聰いお前のことだ、そういうもろもろ全部ひつくるめて、結論を下せてしまうのだろう。万劫の刹那。瞬きの一瞬。けれども思考は疾走して回想を回送し回廊を回遊する。瞬く間の情景はあながち走馬灯つてこんなんだろうな、などとのありふれた感想に結実しながら、記憶の齟齬に血を巡らせているのかもしれない。学力だとか知識だとかじやなく、お前は昔から利口だつたから。

影に埋もれる手を引っ張り上げられた記憶がある。

憧憬では足りない焦げ付きに焼かれる記憶がある。

閉鎖する常識が破碎されて飛び散つた記憶がある。

春風がなびく。寂しく髪をさらう。

刹那は須臾へ、逡巡、模糊そして漠へ。しかして渺には至らず次の瞬間には「フツ」とした霞みを浮かべて……ああ、それはなんともお前らしい笑顔だ。

「久し振りだ、『一夏』」

かくして五年ぶり。

アテクシシこと織斑イツピーは篠ノ之モツピーと再会することになつたのだ。



しかし続くよ！　まだ終わらないよ！

なんかいい感じに幕切れっぽいけどそんな空気はデウス・エクス・マキナでござるぜ。久しぶりのモツピーである。生モツピーである。字面がエロい。

いや、はたしてそれだけだろうか？

「……なんつーか、うん。綺麗になつたね、箒」
「世辞は止せよ。照れるだろう」

もう多分つーか確実に俺が改めるべくもないほどに伝わつてゐるんだろうがなにを隠そうこの篠ノ之箒、とても美人さんである。

黒髪は艶やかに。輪郭はシャープ。メリとハリで凹凸を描くスマートバディ。都雅に切れる双眸に、桜に濡れる口唇のツヤやかなるかな。およそ一五歳にしては出来すぎた、女性が必要とする要素を惜しげもなくその外装に搭載している。なにこのエレクトロアームズ。

しかしだがそれだけに止まらず。かわいいよりも美しいを体現する御身において、その軽やかさすらも超越して体現する犀利の極峰の、なんと冷え冷えする刀身か。
 ソードレッグ・ソードヘアー・ソードフィスト・ショーテルボーン・レイビーポイズ
 刀身・美脚・一尾黒髪・無垢御手・曲線骨格・突先妙声・騎士眼光・太刀麗貌・常住戦陣・
 ブレイドワックス・セイバー・カタナ・カタナ・ソードブレイカ
 一刀専心——その体の全身を持つてして、刀剣のなんたるかを体現していた。

そういえば昔、箒のことカタナみたいとか言つてたやつがいた気がする。当時の幼心にも納得できるほどだったが、今となつちやそれどころじやねえ。超カッケー。なにこれ、どうして男の俺より凜々しいの？　俺が死ぬの？（男性として）

「イヤミか貴様ツツ！」

「……嫌味がましいのはどちらだ」

コンチクショーコノヤロー。まるで俺が『男の子』を教えられてないみたいじやないかよ。いや確かに壁になる親父なんていないけど。ああでも千冬姉は十分壁とかもう色々超越してるけど！ お前のそのかっこよさが一欠けらでも俺にあつたなら……！ 亜弓さんの嫉妬シーンを見たときの胸に迫る思いつたらなかつたよ。

「篠ちゃん……おそろしい子……！」

「……怖がられてもな」

オーケー落ち着け俺。どうやらまだテンパつてるらしい。それに花とゆめ購読者つてバレた。

篠さんの怪訝げな目が大分痛いです。あと騎士眼光セイバー・アイズとかナチュラルに銘々して自

分が痛いです。マジブラツククロニクル。ロリコンではない。

閑話休題（言つてみたかった）

普通にしよう、普通に。

常識に当てはまろう、常識に。

いやそりや規格外のナイスレディ目の前にして常識もへつたくれもないんでございましょうがね。

冷静にならんといかにやあな。熱血して鉄血がうんたらかんたらに落ち着こう。

改めて筈さんを見る。うん、美人。俺が女だつたら抱かれてた。おお、ビューリホー。ただしボクサーにはならない。

「美人だなあ」

「まつたくさつきからどうしたんだおまえは。いやさ褒められるには否はないが、そのだな。おまえに言われるのはやはり照れるよ」

ぱりぱりとそれこそ漫画の一描写のごとく赤らめた頬を搔く筈ちゃん。

……いいね。やっぱ女の子なんだね。

オーゲ。大分調子戻ってきた。

「しかたないんです。筈ちゃんがおよろしくなつてるのがいけないんです」

「ふふ。だつたらそういうおまえは——うん。変わったな」

「変わりますとも」

「……五年振りか」

「……ああ」

束さんがIS発表して、世界が変わつて、要人保護プログラムで筈ちゃんが転校して、五年。

今でも覚えてるよ、その日のこと。誰よりもかつこよかつたお前が駄々こねるのは新鮮で、だからこそ辛辣で、きっと俺の心は張り裂けていた。……ああ、覚えてる。お前

が俺に提示したことだつて。

俺はそれに乗らなかつた。乗れなかつた。

俺は弱くて。お前は強くて。

お前が連れ出してくれた日向のなかで、焼け焦げてしまうほどに脆いから。

脆かつたから——。

「ところで篠ノ之さん。そろそろ私を紹介していただけると嬉しいのですけれど」

「む？ ああ、すまない四十院。私としたことがついつい哀愁に呑まれていたよ」

二人してある意味の感傷に耽つていれば軽やかに、これまた美声が空間を揺らす。

そうだ。ここにいるのは篠ちゃんだけじやねえ。

もう一方。^{ひとかた。}緑の黒髪で陽光を流す和製の佳人。

確かお名前は……。

「一夏、紹介しよう。こいつは四十院神楽。私が世話になつてている企業の社長令嬢さんだ」

「お初にお目にかかります、織斑さん。あなたのお話は篠ノ之さんから常々……なんで
も大層愉快なお方だそうで」

ちよつと篠ちゃん。俺のことどんな風に話してんの？ おもしろいとか一步譲つて
気さくなくらいの紹介ならいいけど『愉快な男』って確實にあれじやね？ 誤解生まな

い？……生まないな。否定ができない！

「くすくす。噂に違わないようですね、織斑さん」

「だろう？」

内心のもやもやに喘ぐさまを見て美女二人がうんうんと納得の意を示していた。
当然のごとく遺憾のイッピーです。しかしかわいいから許す。いい匂いするから許
すでござる。

そんな四十院神楽さんを改めて捕らえる。……なにこの美人さん。

篝ちゃんを散々美人！かつこいい！フエムタチ抱いて！なんて褒め称えたけ
ど、こちらも負けず劣らずの美人さんだ。お淑やかというか、浮世離れというか、もう
あれ。見るから感じるからに一線画して。あえて言いたい、佳人であると。

純和製。大和撫子つてこういうことなのかも知れん。そんくらい、すごい。

なんかかわいいかわいいしか連呼しない昨今のガールズよろしく語彙の貧弱さが恥
ずかしいが、どこぞの誰かが言つたのさ。究極に近づけば近づくほど表現は陳腐にな
るつて。こういうことなのかもわからん。

そんな美人さんに実ははさまれて座つてしているのでござる。

いやほら屋上にベンチあつてそこで一人が座つてご歓談してたわけであつて女の子
同士だからって密着して座るわけでもないからちょうど間に一人分くらいあつてやま

しい気持ちはないです本当です四十院さんいい匂いですはあゝh s h s ! h s h s !

ああここにあつたかアルカディア。俺は高みへと導かれた。

キーンコーンカーンコーン。

楽しい時間はすぐすぎる。

香しい少女らのにほいを搔き消す機械鈴の振動は実にアタイをイラツピーにさせますよまつたく。美人と佳人にはさまれたら誰だつて動きたくなるさね。

とはいえ、遅刻でマイ・フェイバリット・ブリュンヒルデの顔に泥を塗るのはいただけない。

「疾風迅雷ツ！」
タービュランス

「おい、待て、一夏。私たちを置いて行くのか

「俺は今から九回授業に間に合う！」

でも正直劫の眼がいいです。俺の雷切で女の子たちと（自主規制）

脇目も振らずに女の子を置き去りにする俺。手のひら返して突発的に。そんな気分

屋さんがイツピーです。

「まったく一夏の奴は……仕方ないな。失礼、四十院」

「良き哉」

「うん？」

そうして気になつて振り返つてみれば。

篠ちゃんが四十院さんをお姫様抱っこしながら疾走していた。
え、ちよ、なにあれ。どこの星の王子様だよ。サムライつつーよりナイトだよ。男の
尊厳丸つぶれだようつせ元からそんなのないとかいうなよ。今度「世界を革命する力を
！」ってやつてもらおう。

……今日から腕立てをしようと思つた、まる。



「それではこれより一年一組のクラス代表を決める。自薦他薦は問わん、誰かいないか
？」

教室への帰路をプリンセス抱っこで駆け抜け道中の少女諸兄らをきやーきやー沸
かせたのも新しく、初の授業である。入学初日からである。

I S の専門課程やりながら高校の単位も取らなきやいけないから時間割カツカツな
んだつて。夏休み短くならなきやいいけどなあ。
教壇には千冬姉。少し離れてやまや先生。

準備万端で早速授業、の前になんかなんか代表決めるだかどうとか。クラス委員長兼対抗戦の代表だつてよ。おいカール、次の手が透けて見えるぞ。

「はい！ 織斑先生つ」

「立候補か、相川？」

「織斑くんがいいと思いますつ」

ほれみろやつぱり、俺に押し付けにきやがつた。

わかるよわかる、クラス委員なんて面倒なことを他人に丸投げしたい心境なんてそらあもう共感するさ。でもそういうのよくないと思うよ。人は毅然として困難に向かうべきだよ、そういうときにこそ勇気は發揮されるんだと思、う、よ、つてオイ。

「相川……お前、友達を売つて出世するのか……！」

「そうよ。私は中からこのクラスを変えるの」

ファツキンのマタ・ハリ野郎（女だけど）

謀られたーマジ謀られたー。同中とか関係ないわー。ぜつてえあのアマ俺がスマホ勢じやないのいいことにグループ内で俺の悪口書き込んでるわ。つぶやイツターで晒し上げてやる。全国二九人のイッピーファンを舐めるな。

ランスロット相川。そんな人間KMFはチッピーだけで十分だぜ……。

「はい」

「どうした四十院。おまえは自薦か?」

捨てる神あれば拾う神あり。

暗澹に沈む我が心に清らかなる女神の歌声が響き渡る。

その名、四十院神楽。

赤い河のほとりあたりでイシュタル様とか崇められそうな颯爽たる御心で、よもやクラス代表が決定しそうな雰囲気を打ち抜いた。

すごい、すごいよ四十院さん。ああ、あんた俺の女神だよ!

「私も織斑さんが適任だと思います」

女神は女神でも断頭台の女神だつた。

ふえええ、助けてお姉ちゃん。みんながイッピーいじめんの。おいこら颯爽と候補者一覧に俺の名前加えてんなよ。本人の意見ぐらい聞いてみろよ訊いて下さいお願ひします違えよ顔赤らめんなよアイコンタクトだよ愛コンタクト（意味深）じやねえよ察してくれよもうウインクしちゃう。便所の落書きを眺めるような目をしていた相川はタイキツクである。

空間投影の黒板（と言つていいのかどうか）にデカデカと表示される我が名前。チツピーは俺の辞退に聞く耳持たなかつた。
このままじや俺に決定してしまつ。

よろしくない。

だつたらどうする？ 決まつてる。

だつたら俺が、

「——織斑先生。私も立候補します」

誰かを推薦するまでもなくどなたかだかが自ら立候補してくれやがりましたよナイ
スだぜ。

新たに君臨した闇風を払う光の女神に手を合わせるべく音源に眼を向ければ——な
んてまどろつこしい茶番な心境を綴るまでもなく。

その声。その色。

この俺が、誰だかと判別つかないはずがなくて。

「私も、この篠ノ之箒もクラス代表に立候補します」

きりりと凛然、ただ刃。

刀身走る波紋と震わせ、空気を撫でる確たる声で、麗しかな。

篠ノ之箒は冷然と、己おのが意思を表明していた。

反対なんてない。反論なんて上がらない。むしろ「おお！」「きやあ！」なんて歎声のほうが強いくらいだ。だつてテストパイロットをしている女の子だぜ？ 単純に実力を予見すればいくらたつた一人の男子とはいえ、およぼうはずもないだろう。おまけにかつこいい。誰から見ても外に出すのに恥ずかしくない。クラスの顔を張らせるのに否はない。なのに。

なのにこんなときだからこそ、改めて、言う。
次の手が、透けて見える。

「良いだろう篠ノ之。唯一の立候補者だ。

幾ら他薦とはいえども織斑はやる気に欠ける。教師としてはやる気のある者に一任した方が安心出来るわけだが、そうさな。それでは推薦した生徒らも納得すまい。

ああ、であれば——

「ええ、でしたら——」

なぜか体が冷える。

黄色い歎声、ある種の盛り上がりさえ見せる教室のなかで、きっとこの感覚に囚われているのは俺だけだ。小粋なジョークも冗談も、ひょうきんを演じる言葉さえ湧き上がらない。

背骨、体幹、体の芯。ぞわりと伝達する零下の疾走。筋纖維と血液循環が媒介するはずの熱量が今ばかり、今ばかりは冷却材を輸送する金属ポンプのようにしか感じない。織斑千冬。かつて最強の名を欲しいままにした、最強。

それを前に、なお鋭利犀利とナマクラに色褪せない篠ノ之箒、幼馴染み。二人の目が、俺に合わさつて。

「織斑と、クラス代表を賭けて試合に励んでもらおうかな」
「織斑と、クラス代表を賭けて決闘に臨むしかありません」

たつた今、俺こと織斑イッピーと篠ノ之モッピーの決闘が決定したのだつた。

吐きそうだ

不安で。

怖くて。

どうしようもなく、狂わしようもなく。

恐れに恐れて、張り裂けるように泣き出しあたくて。

天上高く武威の頂点。黄金の極光を背景に頂く桜花が宝剣。
まばゆ
眩ぐ眩しく輝かしく、煌めく太陽に対抗する地上の灼熱。

それに照らされて生きてきた。それに焦がされて歩いてきた。

巨大な光源。ゆえに影は濃く、陰は深く。

我が身の空虚さにひび割れ沈むゴミクズの心は、一つの幻想に手を伸ばす。

誰かが望むナニモノか。

誰しもが求むナニモノか。

るべきものを見るべき場所に。

可能性の仮面。

『そう』あるこそが自然真つ当で至極当然。そんな存在。

その『可能性』——刈りとつてくれたのは、誰だつたか。

オリムライチカ



夕焼け小焼けで日が暮れて、逢魔が時に心が軋む。

帰宅なう。帰路なう。気力損なう。

入学初日からハプニングとか王道的なラブコメ展開はハーレムものにかぎつて実に許容するところだが、持ち込まれる議題がラツキースケベに結実しないのであれば芥も同じである。マジ芥・エスト・ファーブラ。あれその脚本家だとラツキースケベ（必然）にならね？ ちよつち獸の爪牙になつてくるわ魔名はいらない。

I S 学園は全寮制とのこと。男児たる我輩もその例外に嬉しいことにあぶれなかつたためなんと女生徒諸君らと同じ学生寮で生活であるやつたゼランドリーで人の少ない時間帯を調べねばなるまい他意はない、決して。

というか二人で一部屋使う仕様らしい。つまるところそうしないといけない程度に部屋数がかつかつ。そんなところにイッピー様の乱入だ。いつたいどんな割り振りになつてるんでしようね。もしかして女の子と相部屋だつたりします？ チッピーも女の子だよねとかいうオチはお呼びじやないから頼むぜおい。

「…………」

心が、上がらない。

熱が、回らない。

果敢に脳内を疾走させるいつもながらの妄言連打は普段以上に虚しくて、互いが無様に磨耗して、気づけば碎けて灰になる。思考のゴミ箱があるのなら、そこはきっと全人類の英知が集まっていることだろう。

黄昏時に黄昏る。

つまらないジョーク。

——筹ちゃんと決闘が決まった。

なんだよ決闘つて。

このご時勢におかしいだろ決闘法とかどうなつてんのよ犯罪だろタイマン張っちゃう弦太朗さんも正味年少送りになつちまうよソースは野崎君ああ治外法権でしたねえここ！喧しいわ。

ないわー。ほんとないわー。

入学初日から問題とかなんなんすか。問題るやつは不運と踊つちまえつて？ どうせならT.O. LOVEりたい。イージーモードで疾走して思春期をバラベラムりたいんですよこちどらさあ。それだと大人になれないぜ。あながち違つてないのが悔しい。

あと俺はR—16派です寿クン！

予感がなかつたといえは、嘘だ。

不満を申し奉るとはいえ。

不評を上げ連ねるとはいえ。

篠ノ之箒と相見えたその瞬間に、こうなることはわかつていたはずだ。

正直箒ちゃんは、少なくとも俺の記憶のなかの彼女は、闘争というものを好んでいた。

剣道場を営む家庭環境がそうさせたのか、はたまた生来的なものかは知らないが、とにかく。とにかく戦い、鎬を削り、技を散らすという行為を好いていた。ほうきちゃんはまぞ。おねえさまのあしの（自主規制）

……というか、そうだな。んな七面倒なうんぬんのわけもなく。

ただ。

負けず嫌い。

その一言に尽きるバカで、諦めの悪いアホだつたのだ。

だから世界最強に向かつて行けたのか。

だから自由奔放と駆け回つて行けたのか。

だから、別れの際の最後まで、俺の先を歩いていたのか。

今彼女はどうだろう。今の箒ちゃんは、どうだろう。あの頃のままか、変わつたか。

そんなのモチのロンに変わっている。六年つてのは軽くない。俺が『こう』して『こう』なる程度に、筹ちゃんは大人びていた。鋭くなっていた。なんだか人当たりもよくなつて……正味昔はガキ大将的な果敢さと口下手と不器用さが混ざり合つて友達なんて数えるほども——それこそ俺くらいしかいねーってほどにはコミュ障だつたはず。まあおかげでアタイが散々引き連れ回されたんだけどね。先生方からイジメ容疑をかけられていたのはご愛嬌だ。

そんな強さを抱いたまま、変わったのか。

そういつた幼さを秘めて、礎に、研いで、鍛えて、あの頃のように笑つている。

だつたらきっと今度もまた、この手を握つてくれるんだろう。強く掴んで引っ張つて、日向に連れ出してくれるんだろう。だつて。だつてさ。

『イッピー、おまえはオトコの癖に――』

それは原初の莊嚴ではないけれど。
きつかけでは、確かにあつて。

『——織斑と、クラス代表を賭けて決闘に臨むしかありません』

つまり今日のその言葉つてのは、お前が俺のことをどういう風に見ているかつてことの証左なわけだ。

変わった。変わった変わった、変わったなあ、箒ちゃん。
色んな不純を削ぎ払い、眞の真金に近づいたさ。

変わるとは、変化とは、なにも変質だけを指していうことではない。

ナマクラを研ぎ上げるも変化であり、修練でより成功な技に仕上げるのも変化であります。

用途を変えずに、より強く強靭なものへと昇華すること。

——業物が大業物に昇格される。それも、変化だ。

それはただでさえ真つ直ぐだったやつがさらに磨きをかけて研ぎ澄ました、すごいやつがもつとすごいやつになったという意味での変化。ようするに純度としての激変で、抱く根幹・心鉄こそは未だ在り。確然としている。変貌してゐるのではなく、変化してゐるんだ。

だから、それがための陥穰。

己がより純度が高くなつたからおまえもそだらう？ という、帰結。

?

俺たちの関係がどういうものかって、ずうつと疑いもなく『そう』信じてるんでしょ

あの頃のままに、私が純度を上げたのだから。

お前もまた、あの頃の役割のままに精度を上げて いるはずだろう？

そんな風に対戦が決まつたわけでして。

言わずもがな、俺は受けたわけでして。

柄がらにもなく冗談のキレもなく熱もなくだらだらぐだぐだ思考を回してるのは。

「俺の将来の夢はシユレッダー機だつたじやん、クソツタレ」

わりと真面目にイラツピーなんですよね、ワテクシ。

あーもーあれよ。鈴ちゃんとか弾君とか御手洗くんとか蘭ちゃんとかが見たり聞いたりしたら腹抱えて笑うか録音して後日黒歴史発表会するか切れたナイフ〇なんつてバカにするようなこつたろうけど、つーかもうすでに穴があつたら入りたいけど！ どうにも譲れないものがあつたりする。

そりやあ誰だつてそんなことの一〇や一〇はございましょうが、これは、今の織斑イッピーがやりたいこと。

素のままに、気のままに、あるがままに、わがまま。酷い自分勝手の大横暴。感情ばかりを振り上げる、子どもっぽさの典型例。

でも、それでいいのだと認めてくれる人がいるのだ。教えてくれた人がいるのだ。
だからあいつらは俺をバカにするけども。

決して、馬鹿だと言わないんだ。

ゆえにここはバカらしく。

篠ちゃんにこちらで一発、織斑イッピーを教えてやらにやあいかんでしょう。
お前がくれた三種の神器——そしてみんながくれた四番目。

教えてやらにやあ、いかんでしょう？

ちなみに小一の『将来の夢』作文にシユレツダー機つて書いて以来未だにネタにされる。愛だと信じたい。

しつかし正直、争いごとはきらいでござるのにね。

そりや痛いより気持ちいいがいいし？ 辛いより楽しいがいいし？ 刹那主義と快樂主義の折衷案でニコニコできたら一番じやねーかつて。負けず嫌いで見栄張りたがりの自覚はあるけど、決刀ブレイド・ジャンキー中毒でキヤツキヤウフフはガン萎えだわ。もつと健全に幸せラズベリー唱えようぜ？ ただしラズベリーはあまり好きではない。

でも篠ちやんだからなー。モツピーは特別だからなー。

穩便で面白楽しく愉快ならいいんだけど……ああそうさ、心臓の熱は誤魔化せない。
二律背反。そりやあ刺激も過激も好みだけどね、別に修羅曼荼羅出身のラディカルブ

レイバーじゃないんですよ。祝言は挙げる側より参列する方が性に合つてゐるんですよ
紫織さん！ ポジション的にあつちが石上神道流だね！ 僕の首が飛ぶね！ うるせ
えヌキヌキポンさせろや（マイルドな表現）

つたく熱血沙汰なんて俺みたいな平和主義にはウケが悪いぜおい。
いや嘘じやねえし。日和つて終わるならラツキーだし。

マジマジ。俺つてば平和主義だつて本當だつて。

アーケン石エルフに渡すぐらいには友達想いだつて！

そいであれよあれよと一年生寮に到着。

早い。実に早い。考えごとしてたせいか知らんがもう着いちやいましたよ。これ一
時限目ギリギリに起きても遅刻しなくね？ 朝は弱いからこういうの嬉しいよ。代わ
りに夜は強いゼマダム（真顔）

山田先生に渡されたルームキーは1025室。ホテルもかくやの内装をイッピー的
批評するのも速くしゆたたつと階段を駆け登る。大浴場の場所は覚えたあしからず。
到着、門前なり。

照明を反射する1025のプレートが眩しい。

宴の準備は大丈夫か？ チエック、ワン、ツー。よし。

「ルームチェックの時間だコラア!!」

でもちやんと手でドア開けるのがイッピークオリティ教養がすごい！

「む？」

ボイン。

まずは、ボインである。

——ボインの話をしよう。

ボインとは、魅力的に作動し、魅惑的に動作されなければならない。

霧島さん直伝のものはや味のしないガムみたいな三番煎じエントリーを果たした拙者の前に飛び込んできたのは圧倒的視界占有力を誇る二房の禁断の果実であり珠と水滴を乗せる瑞々しさを目に蛇の甘言など過たず聖書に倣うがごとくの衝動に駆られるのはなるほど人類の抱くオリジナル・シンであり楽園追放に追いやられるは無神論者を黙らせる格好の経験で無論のこと代償はソドムへの幽閉なれば墮天奈落の跳梁跋扈に未だアダム・カドモンは現れずアビスに引かれて真なるツオアルへの到達ははるか彼方つ

まり端的に申しまして。

女体があつた。

全裸である。

ボン・キユ・ボンのナイスバディである。

湯上りらしくお湯に濡れ、湯気をまとい、濡れ髪をなめかましく。

素つ裸の生まれたまま。

篠ノ之箒さんがいらつしやつた。

「凄く……一撃必殺です」

おいおいどうなつてんだよ I S 学園おもにチッピー。

どうしてダイナミックエントリーした先に全裸の箒ちゃんがいるんだよありがとう
ございます！

神聖を置き捨て、一見に身魂すべてを投するなど、かくも容易い！

かくも容易い工程によつて、ボインは実現する！

「その……なんだ。私にも羞恥心くらいはあつてな。

そんな熱心に注視しないでくれると嬉しいのだが……」

あまりにも堂々とラツキースケベに賜っていたせいだろうか。

数瞬というには存分すぎる間を空けて、おずおずと篝さんは腕で体を隠しつつ背を向ける。

実際に色っぽい。唐突だが俺には写真撮る趣味があつたりするよ。

「ハイ篠ノ之さん。ピースピース」

「梵天王魔王自在大自在、除其衰患令得安穩、諸余怨敵皆悉摧滅——」
〔フリューゲル・ブリツツ〕

「瞬間魔力換装（自力）！」

蝶声が飛翔する前に廊下に転げ出るイッピーを誰も咎められない！

わあい平和。いちか平和大好き。

ピースだけにてな！

俺はキメ顔で言わざる得なかつた。



なにが、とは言わないが。一説によると眉毛の色と同じらしい。
 なにが、とは言わないが。白の特急券でした。
 グレートだぜ。

「つまり、おまえが私の同室というわけか」
 「そのとおりでござります」

ダイノガツツ！

で。

廊下に追い出された俺が吉田さんにプリンセスダッコだかしてまろびでそうな巨砲にただでさえベイベーしてたベイベーがスピリットエヴオリューションしかけてたら「昼間の篠ノ之さんのパクリー？」とか言われてちょっとへこんでポツキーがたけのこの里に帰ってきてマジかよ中折れしていいのは2.5mmバランスまでだろ……のあたりでオープンセサミした1025室に再突入ああ降下作戦前のチキンダイバーズの心情がよくわかる。

今来た産業。

篝ちゃん

着替え終わって

事情説明

「多分姉さんの配慮だろうな。

いきなり赤の他人と相部屋になるより知り合いのほうがいいだろう、つて」「ははあ。千冬さんも大変だな」

「女の子のなかに一人投げ出された俺のほうが大変ですー」

「自ら進んで骨を折つて、よく言うさ」

五体投地でご慈悲に賜つたのも新しく。

箒ちゃんと同室つてのは間違いでも勘違いでもないようだつた。

しかしだが、ありがたい。そりやあいくら俺が健全優良な人畜無害こと人畜さんだとしてもね、見知らぬおんにやのこと共同生活なんて耐え難い。まつば見られてビンタの一つも飛んでこない箒もどうかと思つちゃつたりしますけど。俺がサイブリットだつたらループ再生していただござる。だよなレンツオ！

……にしてもやっぱ悔れんぜ、箒。

なにがとは、言わんがね。

「それで、一夏。おまえの機体はどうなつたのだ？」

「ああ、それな。データ取りもかねて、学園で専用機用意してくれんんだと。数日中には用意できるつて話だが……お前のときまでには間に合うだろうさ」

「ふうむ、そうか」

専用機。つまり専用IS。

ほら箒ちゃんと決闘もとい試合が決まつたじやん？ でまあ日程一つにするかなんて話になりまして、そしたら俺つちの練習期間を見越して一週間後と相成り、ああそれ

ならそれまでに専用機が間に合うな（ｂｙチツピー）、なんてことになつてゐるわけだ。
 一応唯一の男じやん？ そうなると稼働データがのどから手が出るくらい貴重なわけで、つつがなく専用機つづー馳走に与る次第なわけだ。関係ないけどざます口調つて吉原あたりから派生したらしいよ。芸妓さんと遊女一緒にする昨今の流れはどうかと思うな。でも成人式で花魁の格好するのは許す、許すでござる。あれはいいものだ……。

話戻つて専用機。それをなにやら氣にする等ちゃん。そりやあこれから戦うことになる相手の情報、気にならない輩なんぞ武芸者としては落第だ……侍はどうかは知らんけど。タカヒロ的には武士娘だけど。ダイスケ的にはオールオッケーだけど。
 ということよりも、等が心配することはもつと別で。

「ならば私も気兼ねなく、専用機で臨めるわけだな」

つまり敵情視察とかなんて微塵もなくて、ただ公平に、私が全力を振るうに不備がないかと、そういうことらしいです。

そうともこいつはテストパイロット。しかも稀有な専用機持ち。

いくらＩＳが登場してから日が浅いとはいえ、比例してパイロットも若くなる道理は無論ない。

そのなかでも専用機を与えられてるつづーことは秀でて優れてることの証明であり

……裏返せば、もしも専用機がなく俺が量産機だつたとしたら、それに合わせて自分も量産機にしていただろうつていう手心——はン。なんとも大層なお手前で。

ある種傲慢の凝つた考えのまま、俺をそういう風に見ていると。

あの頃のままのそのままで、私たちは『そう』だつたろう、と。

先頭に彼女。その影に彼。極光よりも暖かな日陰にて清々の明々。極彩色に斬新で、切りつけるように朗らかで、進歩する鉄鋼船の雄々しさで、憧憬。流入してくる新世界

うーむ。これはあれだな。——虚偽にしてえわ。

「男子三日会わざれば刮目して見よ。

無礼^{なめ}るなよ等。俺がいつたいどういう男か、弁えた上での狼藉か?」

「火付きの不安定な青二才は頬を張るまで起きんでな。

私の経験の話だが、虚けは無自覚に心得ていて可愛らしいよ」

「ファツ!?

え、ちよ、なにこれなんのこの娘。

こいつこんなに口悪かつたつけ? もつと剛毅木訥質実剛健に潔くなかった? サムライガールはどこいった。落ち武者つたの? お前のねーちゃんですらもつとおくすり飲めたねに包んでくれるくらいには歯に衣着させてくれんのに。ちなみに俺はぶど

う味が好きです。

「どうした一夏。言い返さんのか？」

「ん？」と傲岸不遜の傍若無人。

まさしくウザさあまつて憎さ一〇〇倍。そこまで口が達者でいらっしゃるならぜひとも我がソハヤ丸もいじめてもらいたいものだ。

一聞して口悪のそれに、ああ。しかしここでようやく気づくのだ。

とどのつまり、なんだ。怖気づくなと。

日和つてないで戦えと……なんとも巧妙不器用に、イツピーを煽つていらつしやるのだ。

私がおまえの『強さ』を見誤るわけないだろう——やつてくれる。

やられっぱなしは、性じやない。

「——いいぞ吠えてろ。

そうしてまで手にしたい瞬間があるなら、お前にオトコノコを教えてやる

「私は速いぞ。知らぬわけはあるまいな？」

知つてるよ。その速さ。

知つてるよ。その強さ。

お前はそんな大言壯語さえも中身のともなつた眞実に変えてしまうつて。なにより

誰より近くで見てきた俺だから、知らないなんてあり得ないよ。傲慢にだつてとれる自信過剰っぷりを虚偽威しにしないくらい、お前が強いのなんて皆目存知だから。

だから。

「筈」

筈ちゃん。

「なんだ?」

俺。

「負けないからな」

イッピーという今を。

俺が俺としてあるがままの今を。

お前が知らない物語を斯く語ろう。

「……そうか」

しかしなぜ。

その一瞬に滲んだのが。

憮然、だつたのだろうか。



ゆうべはおたのしみでしたのにね（落胆）

別に初日から懇ろな関係を期待していた俺はない。
同室が筈だと知つて諦めた俺はない。

ハッピージョブもできずに悶々とした俺はない。
そんな俺はない。いないのです。

『朝起きると隣り（のベッド）に女の子がいた!?』をリアルに体験しつつ起床——がで
きなかつた。だつて起きたらもう隣のベッドにいないんだもの。期待はしてませんで
したとも。

だができればもう二人ばかし役者増やしてオルタードでフェイブラな夢を叶えてく
れてもいいと思います。となると配役的にモッピーとたばたばにはさまれてラブリー
マイエンジエル鈴ちゃんが起こしてくれるのか。間違なく鈴を抱きしめて二度寝だ
な。

ちなみに昨晩はそのまま共同生活する上の軽いルールを決めて就寝。実は枕変わる

とと寝れないなんていう繊細なワテクシですがなぜか枕が家で使つてゐるやつだつた。チツピーの手際の良さはすごいね。下着の数が合つてないのは気のせいだよね。

そうして眠気眼で半覚醒していれば、ちょうど朝シャンしてきた筈とグツモーニング。

一年生の部活動はまだ始まつてないから個人的に鍛錬でもしてきたんでしょう。朝っぱらから風呂上りの女の子と対面できるなんて安いラブコメでもあるまいにやつたぜ。

でもつて食堂で二人してレヴエルの高い朝ごはん食べて。

すれ違う女の子達に爽やかな挨拶を返しつつ登校して。

俺の専用機は試合ギリギリになるかもとかありがたいお言葉をいただいて。
テキスト丸読みな鷹月さんがいい匂いで近うよれガールで。
ちよつと幸せな気持ちに包まれて。

「――あの人は、関係ない」

この、ザマである。

遮らなかつたのは斬られると錯覚したからだろうか。

①：鷹月さんがテキスト丸読みでちょっとドヤ顔。

②：『ＩＳコアは篠ノ之東博士しか』とか言う。

③：谷本さんが『もしかして篠ノ之さんって博士の関係者?』なんて疑問を投げる。

④：チッピーとも容易く肯定。有名人つてことでみんながわいわい騒ぐ。

⑤：筈ちやんが太極↑イマココ！

いやどちらかってーと波旬ブースト？

いやいや束ブースト？

いやいやいや、それこそどうでもいい。

そんな茶番の付け入る隙はなくて。

その一言は、まさしく言刃コトバだつた。

零下凜冽酷寒蕭条の、冷たい刀の一撃だつた。

激情でもなく。赫々としているわけでもなく。怠慢怠惰の惰性でも、表面を取り繕つた偽りでもない。誇張とか脚色とか迂遠とか大げさであるとかも無論、だのに外界の拒絶なんておこがましく。見当違いなんて余計なお世話で。

本当に、どこまでも、自分自身で制御し切つた、してしまつた。

殺意だつた。

誰もが口を噤む。無言に強要されて停止する。

それでも可憐な居合い演舞を終えたあとのように納刀するさまは、感情に押し流され

たわけではないのだと無音で語っていた。

ついカツとなつてやつた。そんな未成年の主張を蹴り飛ばす、己の判断の上に成り立つものであるのだと。

流されるなどいう。染まるなどいう。呑まれるなどいう。

闇落ち復讐偽悪にダークサイド、落ちて墮ちるなどいう。
人は。

そうあつてはならないと云う。

恐怖や怒り、感情に支配されるのが人間だが、感情を支配できるのも人間だ。
だつたら、彼女は。

恐れは怒りに、怒りは憎しみに、憎しみは痛みに——その連鎖をぶつた切つて支配立脚する、彼女は？

そうしたどうしようもない空気のまま、一年一組は午前の授業を終えるのでした。



◆
正直フオローのしようがねえですよ。
女の子が怒鳴つたらあれかな、とか。クラスの雰囲気悪くなつちやうかな、とか。

ちよつと流れ的に察して口はさもうとか画策していたのがもはや懐かしい。なにあれ。
どうにかできたの？ 刃に触れて自傷なんてリアル自滅因子はマジで勘弁五秒前。び、
びびつてたわけじやねーし。

忸怩たる。しかしマヌケなことに腹は減る。

カツカレーを所望する胃袋には遺憾ながらも抗えない。

食堂なうです。

「しかしやはり、こここの食事は実に美味だな」

「ハム、ハムハム」

「国外の生徒に対応する過程の副産物かな。品数の充実が結果として品質の向上にまで
一躍買つてくれたというわけか、なんにしても私が難癖付け入る四隅はないな」

「ハム。ハムツ」

「そうか。旨いか」

ハムちゃんズはズツ友だよ！

まあハムスターの寿命は二年そこららしいけど。

確かに甘粕大尉もタイシヨー君は防がねばならんか……。

対面に座る筈さんとお食事。

俺が昼食にチョイスしたカツカレーをハムハムハフハフやつてるとなぜか意思疎通

が成立した。これが幼馴染みのデフォルトなのだろうか。得意顔で一五歳の純情ハーツ読んでるんじやねーよどうせなら武士パイ揉ませろとか忖度してくれよ嘘嘘冗談だよ睨むなよ！

マジで読まれたぞ……すまし顔で逆サトラレさんとか止めてくれ。

なにごともなかつたように振舞つていい、わけじやなかつた。

その、なんとも思つてないという感じのツラ面は。

その、午前中にいたたまれない空気を作つたのを忘れているといった顔は。

冷たい一言でなぎ払つた午前を、まるでなかつたかのように誤魔化してゐるわけじやなかつた。

言いすぎてやりすぎたと、反省することもなかつた。

謝罪の意が反転してゐる色もなかつた。

努めて明るく振舞つて、なに食わぬ顔で昼ごはん食べて、俺の小粋な冗句に『氣を使つてくれてありがとう』なんて内心推し量つて感謝ともいえない少し甘酸っぱい感情に満たされている、なんてことは微塵絶対全然なくて。

少しばかし気さくに感じる食卓風景はただ、純粹にあるがままの素のまま。つまり、さつきの一幕を、本当に気にも止めていないのだ。なにごともなかつたように振舞う、でなく。

ただ単に、なにも『なかつた』ということ。

あんな明らかに『やらかして』おいて。

一片も。一毛も。一つも。

気にかけていない。

彼女のなかではその程度の価値の一場面で。

篠ノ之東に抱く殺意は真実で、決して変わることがないのだと。
それだけは何人たりとも誤解を許させないのだ。……悲しい。
きゆうつと。悲鳴を上げるものがある。

それは、とても悲しいことだ。

そしてその想いは、価値観は、決して揺らぐことのない俺の真実。

悲しいことを悲しいと、楽しいことを楽しいと感じれるこの心こそ、俺の真実。
だつたら。

だつたら俺のするべきことは?

んなこたあいつだつて変わらない。

「なあ筈」

「——ところで一夏。今日の放課後は暇か?」

「心外だぜ俺みたいなナイスヤングがそんなにヒマしてると思われるなんてよどこにで

も付き合うぜ兄貴」

マジバナ期待したみんなごめん。

でもデートお誘いには勝てない！

サー セン。

「だつたら剣道場に来い。撃剣と洒落込もう」

「おうおういいぜお買い物でもゲーセンでもクラブでもバーでも付き合つてやら、ゑ？」

「そもそも快諾されるところちらまで快いな」

お前の笑顔が見れてなによりだ……ッ！

篝ちゃんつてハーレムモノの鈍感主人公属性もつてるんじやねーかな。

なんて、直前までのちよつとイケてる考えなんて忘れて思つてしましました。
女の子つてズルい。



引き続く午後のビミョーにいたたまれない雰囲気なんてまるつと無視して放課後

ティータイムにトキメキながら。

若干異常に煌々と轟くダルさに辟易しながら。

向かいするのは剣道場。

ちよいと遅れてのご登場。どつかの合気道の達人みたいにさまざまなヴィジョンが見えたりしてない程度に足が重かつたのはきっと氣のせい。ええはい、少々胃が痛い。つつてもしかし、剣道は久しぶりだな。何年ぶりだ? 最近はぶん殴られたりすごくぶん殴られたりたつくさんぶん殴られたりが多かつたから道具使うのは久々なんだよな。どいつもこいつもばかすか殴りやがつてまつたく。これ以上イケメンなつたらどうすんだよ。

いやーボコられる未来しか見えねえ。

通常の三倍かけて道場に到着。どつから嗅ぎつけたか知らないが篠ちゃんとの剣道観戦しにこようとしてるやつらを巻くのに手間どつた。第六天魔王の野望張りに偽報打ちまくつたおかげだな。つーか素直に剣道場で待ち伏せしてればよかつたんでね?

第七層の天中殺並みの単調さだぜ。
敷居を跨ぐ。

斬

ら

た

れ

.....?

「あ、…………え」

しかし、なぜか腕も足も首もついていた。
殺されたはずなのに生きていた。

奇跡だ。神秘だ。神の加護だ。

ありがとう生命。俺は、これからも生きてゆく。

——いや、おい。

おい、おい。

おいおい、そうじやねえだろ。

そうじや、ねえだろ？

さつきのは、なんだ？

途端に走つた無色透明で脈絡もクソもへつたくれもないただただ心臓を滅殺するためだけに存在していたかのような旧世界最単調の毀れ続ける運命じみた真金のナマク

ラで行う廻殺劇、なんて幻想を一言『斬』で文字通りに切り捨てるこの刹那。

まるで、とか。きっと、とか。たぶん、なんて。

そんな誤魔化しの婉曲なんかで道化を氣取るなぞ許さず。

確かに。今。俺は。

斬り殺されていた。

無痛の出血が内臓の意味を教えてくれるこの氷河。

凍つたままの瞳が、硬質なままに視線の先で像を捕らえる。

そこにいたのは——剣鬼。

夕暮れに疾走する時間を切り取られた道場のなか。

無音のみが活躍する単調な停滞のなか。

未だ白い日光の差し込む無風地帯に、道場の中央に、黙して瞑する黒髪のヒトガタ。
ヒトガタ
人形。

場所を間違えてたのならよかつた。

風呂の使用時間間違えてまつぱの女子に嫌われるくらいならよかつた。

その黒髪は。

切先諸刃に酷似するその横顔は、閉じた目蓋で断頭するその眼は、鞘に収まる大太刀に類似するボニー・テールは。

篠ノ之箒。

正座して黙する、ただそれだけ。

それだけの、孤独の果てが、そこにあつた。

「 、」

声が出ない。

声帯が動かない。足が動かない。そもそも心臓が動いていない。
無呼吸。血液ケイデンスの凝固。

なのにまだ切り口から流血が收まらない。

錯覚の流血が止まらない。

これはなんだ。

これは、なんなんだ。

——白々しい。

それはどうしようもなくさすがに、白々しいだろ、俺。

前を見る。

お前を見る。

『君』を見る。

「そうだよ、そななんだよ！ それしかねえだらうがよ！ 彼女しかあり得ねえだらうがよ！」

どうしようもなく、どうにもできず、ただただあるがままに鋭利を極めてしまつた刀の女。外来も外部環境もすべてを意に介さず、己がそのままに切り続ける分断魔。完結しきつてにつちもさつちも埒が明かないどん詰まりのどん詰まり！ 終わつて終われなくて結局終わるしかなかつたデイスアドウレセンスの黙示録！ ——既知感。

よく知る感覺だつた。よく見た光景だつた。

一人つきりの一人ぼっちだけが至れる、至つてしまえる、場所だつた。

そうさ、俺はよく知つてるだろ。

この寂しい処を知つてるだろ。

あの世界最大最強最愛最高峰の暴力の化身が至つていたであろう、極寒の修羅場。

一つの理で完成してしまえる、人間大の宇宙開闢。

恐ろしく冷たく、夥しく熱く、呆気ないほどに辛く、終わらないほどに痛い、その場所。

だが。

だが、それでもあのひとは、あのひとには。

うぬぼれることを許されるなら。

あのひとには、それでもどうしようもないお荷物みたいな餓鬼と、それでもどうしようもなく迷惑な友がいた。『そう』ならないでいられる取るに足らないたつた二つだけはあつたんだ。それはいつでも俺にとつて、くだらないとの誇りを受けようとも確かな誇り。でも。

なんてことはない。

でも、なんてことはない。

でも、どうしようもない。

彼女は。

彼女は、この六年間。

ずっと。

一人は、駄目なのだ。

心が折れそうな時に一人でいると、折れないまでも心は曲がってしまう。
独りじや駄目なのだ。

言葉や想いだけじや伝わらないものがある。繋いだ手から伝わる体温でないと、凍えた心は溶けはしない。

沈んでいたとき、助けて／助けられる。

漬んでいたとき、触れて／触れられる。

そんな温もりが——なく。頑なに孤高。

体温がなく冷徹。自らに冷却。

だからつまりようするに、篠ノ之箒とは一人だつたのだ。

織斑一夏が色んな人たちに支えられてきたのと裏腹に、あのひとがそれでも帰れる場所があつたのとは正逆に、彼女は孤独に孤高とただ一人。

一人きりだつたから、こうなつた。

誰にも教えられなかつたから、咎められなかつたから。怒られなかつたから。
誰をも求めなかつたから、正さなかつたから、怒らなかつたから。

『人』の字をぶつた切つて『一』。

支えもなく完成。そして終結。

思つて『鬼』、その名は剣鬼なり。

一人だつた女の成れの果てが、ここにいた。

呆然と、立ち尽くす。

直立不動。未だ呼吸は蒼穹の彼方。

すでに斬撃被弾回数は俺が立てた中指の数より多かつた。

「遅かつたな一夏。早速土合おう」

朗らかな笑みで。

清爽の軽やかさで。

たおやかな挙措で、とても自然な挙動で、正座を崩して立ち上がる。立ち上がって振り返る。回るように追従する柔軟な黒髪は、刃に似ていたが鋼じやなかつた。華やかとうには硬質で、絶壁というには温和だつた。それは理想的なアンバランス、剛と柔の両立だ。こんな女の子に笑顔で名前を呼ばれて、意味もなく喜ばない野郎はいなだらう。

ようやく気づいたとでも言外に言うさまは、青春じみて眩しかつた。

急転直下で収まる剣氣。幻のように、蜃氣楼のように、消える。

そこでやつと、俺は、辛うじて唇を動かせた。

「——いや、止めとく。よく考えたら試合前に決着つきかねない」「私は気にしない」

——そんな。

「男の子が気にするんですー」

——そんな笑顔で喋るなよ、筈。

どうして笑顔でいられるんだよ、筈ちゃん。

ビビッていた。ブルつっていた。

嘘偽りなく。

虚栄も、強がりもできずに。

怯えていた。

予想以上とか、想像以上とか、そんなレベルなんて引き千切つっていた。はるか彼方を
最高速で疾駆していた。ぶつ飛んでいた。

「なんだ、急に連れないじやないかよ一夏」

「うるへー男の子の日なんだよ」

「……私じゃなかつたら許されない冗談だぞ、それ」

それでもいつも通りを装えたのは、もはや奇跡どころの騒ぎじやない神秘だった。
なんでそんなのでいられるんだよ。そんな普通の顔ができるんだよ。

おかしいだろ……気づけよ。お前ならそのくらいワケないだろ。

お前が俺にくれた物は、こんなものじやなかつたろう……ツ！

だから。

だからこれこそがお前の罪。

やめろ。

彼女の最初で最後の弱さから逃げたお前への罰。

やめろ。

『二人で逃げないか？』

やめてくれ。

『俺は——』

やめてくれよ。

『俺はそんなに——』

やめろ、やめろよ。

知つてゐるから。わかつたから。もう十分だから。

それが最初で最後の分岐点で『僕』が悪かつたのはわかつたから!
だから……だからもう……!

『俺はそんなに、強くない』

「あ、」

——碎けた。

多分、すごく重要なものが碎けた。

そんな音だつた。

これもまた、既知感のある、聞いたことがある音だつた。

確か、ああ。あれだ。どつかの毛の生えててもいなガキンチョに被せかかっていた仮面が碎かれたときのあれ。あれと同じ音だ。

「？ どうしたんだ、一夏？」

そうか、だから同じ音がするのか。
だから、今その音が聞こえるのか。

『強さ』を曲解したその劣悪。

彼女を一人にしたやつは誰だ？

篠ちゃんを一人にしたやつは誰だ？

『君』を一人にしたやつは誰だ？

束さんか？ ISか？ 千冬姉か？

いや違う、違うだろう！

ほかならない、俺だろう！

彼女には、俺しか友達がいなかつた。うぬぼれでもなく、自画自賛でもなく、ほかにも確かに知り合いがいただろうが、友達は俺だけだった。憧れだつたんだ、憧れなんだ

！

そんな俺と逃げたいと、始めに引いてくれたその小さな掌で、最後にもう一度自分が
ら手を差し出してくれていたのに！ だからこれは！ この最悪は！

俺の罪。

イッピーの罪。

『僕』への罰。

ああ、そうさ。これは身勝手な錯覚にほかならず、責任を感じるのなどお門違い。

たかが小学生高校生が自意識過剰をこじらせてのた打ち回つて発狂しかける程度の幼稚さだ。責任が贖罪がどうだと、それこそ相手に失礼極まりない迷惑男の勘違いと同じだろう。滑稽だ！ 滑稽だ！

でも。それでも。

でも、きっと。

イッピーなら。

「——なんでもねーよ」

イッピーなら、救えたかもしけなかつたのに。

——ゆえに。

ゆえにこの物語は以下の断言を用いるに至る。ここに断言しよう。これはただ、六年前のあの時に。

砕けたはずの仮面の戯言が、ここに俺の果てを告げていた。

二人で逃げていればよかつただけの物語だ。